

直言

今日は三十回目の終戦記念日。終戦といおうが敗戦といおうが、ともかく三十年という歳月は貴い。しかも、この三十年間、わが国は平和で、戦争をし

なかつたのだから、その体験はまさに歴史的なものだといえよう。この事は、また一方で、この三十年間、世界戦争がな

かったといふこれまた貴重な歴史的体験と関連する。

もちろん、核時代の今日、世界戦争を起してはならないし、また、起らないだろうとわれわれは信じている。いわ

ば、このギリギリの一点では、思想信条や政治的立場の相違を越えて、人類の理性に賭けてい

るのである。だが、この一点においても、中国の人々はまったく異なった

三十年間の平和

なかしま
中嶋 嶺雄

考え方をしている。中国では、周知のように、核戦争恐るるに足りたてられている。

からすという立場から人民を教化してきたが、最近では、第三次世界戦争は必ず起るといふ見方がしきりに鼓吹されている。違があることを考えると、こ

本日にそのように考えているのだからといふが、かつての訪中時に核戦争の脅威についてかなりつこんで話しあ

の断絶そのものに警戒を覚えざるを得ない。もっとも、いまから三十年以前には、わが国も打って一丸、多くの点で今日中国のような考え方をしていたのであり、三十年という歴史の重直軸を現時点で横断軸にきりかえたところに今日の中国が存在するのだといえよう。

その中国の人民解放軍の兵士が農民と交わる姿が、平和の象徴であるかのように、わが国のテレビの画面を流れていた。三十年まえの今日、私は国民学校三年生、いまちょうと小学校三年生の長男が人民解放軍の兵士についての説明を私に求めて

(東京外大助教授)